Osaka University Knowledge Archive

Title	口蓋裂術後患児の構音習得に関する経年的研究
Author(s)	米田, 眞弓
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39536
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【1】

氏　　名	米田眞弓（よねだ まゆみ）
博士の専攻分野の名称	博　士（学　術）
学位記番号	第　12585　号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**口蓋裂術後患児の構音習得に関する経年的研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　和田　健 （副査） 教　授　松矢　篤三　　助教授　高田　健治　　講　師　小野　高裕

論文内容の要旨

口腔の先天的・器質的異常である口蓋裂の治療では，口蓋裂手術による口腔内環境の整備と術後の言語機能の習得指導が基本的な治療指針となっている。今日では，手術方法の発達により言語機能の習得に関する総合的評価は向上してきているが，特異な構音操作を主徴とする口蓋裂異常構音の発現が比較的多くみられ，これに対する臨床的対処の在り方が口蓋裂言語障害における重大な関心事となっている。

口蓋裂手術後の言語臨床では，正常な構音習得過程をとるもの，異常構音が発現し変化しながら漸次正常化への過程をとるもの，構音は正常化するが開鼻声のみが問題として残るものなどの構音習得過程が観察される。従って，口蓋裂術後患児の構音習得の過程を経年的に把握し，併せて異常構音の発現と消長の変化を追求することは，口蓋裂術後患児の構音発達の詳細を知る上で極めて重要な意義を有していると考える。

本研究は，口蓋裂手術法や施行時期などの手術的要因をほぼ同じくした口蓋裂術後患児を対象とし，その構音習得を経年的に把握し，幼少児期における正常構音習得ならびに異常構音の発現と消長の変化を明らかにすることを目的とし，口蓋裂言語障害における異常構音の臨床的病態の把握ならびにその改善指導に有益な示唆を得ようとしたものである。

研究対象は大阪大学歯学部附属病院口腔外科で口蓋裂手術が施行された後，同院顎口腔機能治療部で口蓋裂言語障害への対処を行ってきた口蓋裂術後患児80例であった。口蓋裂手術後から約10年間同一の検者（著者）が各患児の構音習得ならびに異常構音の発現と消長について経年的に追求し，資料の集積を行った。構音の判定は日本音声言語医学会の構音検査法に基づいて，音節，単語，文章，会話時の音声資料もしくは録音資料を用いて聴覚的判定を行った。異常構音については口蓋化構音，声門破裂音，鼻咽腔構音，側音化構音，咽頭摩擦音の5種類が発現したが，これらの異常構音の判定には，各異常構音特有の構音操作法の臨床的確認を行い判定の参考とした。異常構音は音素・音節レベルを指標として変化を追求した。

その結果，1．正常構音獲得率は2歳台：42.5%，3歳台：44%，4歳台：51%，5歳台：61%，6歳台：70%，7歳台：85%と増加の傾向を示した。

2．異常構音の発現がなく，一貫して正常構音習得過程を辿った34例での各音素ごとの構音完成順位と時期は，／n／／p／：2歳台後半，／t／：3歳台前半，／k／：3歳台後半，／tʃ／：4歳台後半，／ʃ／：5歳台前半，／ts／／r／：5歳台後半，／s／：6歳台前半であることが明らかになった。

3．異常構音の発現に関しては，鼻咽腔構音は2歳台，声門破裂音と咽頭摩擦音は3歳台，口蓋化構音は4歳台，側音化構音は5歳台に最も高い発現頻度を示した。

4．各異常構音の初発時期は音素・音節によって異なるが，口蓋化構音と鼻咽腔構音の発現では音素・音節の完成時期に準じた変化を示すことが明らかになった。

5．異常構音を呈した46例中，単独発現型は31例で複合発現型は15例であった。この複合発現型について音素／t／／s／・音節［tʃi］［tsw］［ʃi］を指標として異常構音の変化を追求した結果，鼻咽腔構音は声門破裂音・口蓋化構音・側音化構音へ，声門破裂音は鼻咽腔構音・口蓋化構音・咽頭摩擦音へ，口蓋化構音は鼻咽腔構音・側音化構音・咽頭摩擦音へ，咽頭摩擦音は口蓋化構音に変化する可能性があることが明らかになった。

以上の結果から明らかになった口蓋裂術後患児における構音完成時期は構音発達の評価に極めて重要な指針となるものであり，異常構音の複合発現型で明らかになった変化のパターンは，単独発現型から複合発現型への移行を予防する上で重要であり，臨床的には特に初発異常構音の音素・音節に注目することの重要性を示唆したものである。

論文審査の結果の要旨

本研究は，口蓋裂術後患児について正常構音の習得および異常構音の発現と消長の変化に関して，2歳時から11歳時に至る10年間にわたり経年的に追跡した構音資料を用いて分析検討したものである。

その結果，口蓋裂術後患児の正常構音の習得過程から臨床的に重要な音素の構音完成時期を明らかにし，音素・音節による追跡から異常構音は別の異常構音へ変化しうることを初めて明らかにした。

以上により，本研究は，口蓋裂言語障害における構音の習得に貴重かつ新しい事実を呈示し，異常構音への臨床的対処に極めて重要な治療指針を提供するものであり，博士（学術）の学位を得るに値するものと認める。